



# 第3回植樹祭 約520名参加

～ 5月21日 約2ha 10,000本のクロマツ植栽 ～

名取市民を中心に、宮城県在住の方を対象に「第3回植樹祭」が開催されました。4月上旬から植樹祭参加募集を開始したのですが、5月連休前時点での申込は100名に満たず、目標人数が集まるのだろうかと気をもみましたが、連休明けには多くのお申し込みがあり、前年を上回る参加者数となりました。

前日朝の天気予報は「晴れ」でしたが、前日の昼には「午後から雨」の予報になり、天気が危ぶまれましたが、植樹祭の行われた午前中は曇天で作業にはちょうどよい天気となりました。

今年も、プロジェクトを長くご支援くださっている企業・団体、地元の農協、名取市区長会連合会などの参加がありました。地元の名取北高校からは校長・教頭先生を含め33名の参加があり、慣れない作業ながらも楽しく植栽する姿が見られました。海岸林を将来にわたって守り育てていく若い世代の参加が増えたことは、将来に向けての明るい材料となりました。

2014年に植樹したクロマツがすでに2m近くに達しているのを見学した参加者から「自分の植えた苗がこれから先、どんなふうに成長していくのか楽しみにしています。ボランティアの日にも参加したいと思います」という感想をいただきました。



お父様に手伝っていただきながらの穴掘り、植栽作業の楽しかった記憶がずっと残ってくれることを願っています



(上) 校内での募集に自主的に参加して下さった名取北高校のみなさん。とても手際よく、楽しそうに作業をしてくださいました  
(中) 「名取市海岸林再生の会」のみなさんが植樹祭前日に10本ずつ束ねて整えた苗を、吸水ポリマーを溶かした水につけ、水分保持力を高めています  
(右) おばあちゃんも参加してくれた3歳の男の子。苗の運搬役です



## ～ 5月21日 宮城県知事 植栽地視察 ～ 「予想以上にすごいなあ」

植樹祭が終了した同日の午後、宮城県の村井嘉浩知事、名取市の佐々木市長(当時)、林野庁仙台森林管理署の斎藤署長と共に植栽地を訪れました。

2年前に植栽したクロマツを視察し、2年間で約1.5m成長した姿に「すごいですね」と驚きと感嘆の声が上がりました。続いて高所作業車に乗し、高さ20mから植栽地を一望、「この規模には驚きました。予想以上にすごいなあ。すごい!」と感想をいただきました。

「名取市海岸林再生の会」のメンバーには、「ご本人も被災されているのに、こうしてマツを育てて植えていただいて感謝しています」とこれまでの労をねぎらう言葉をいただきました。



「名取市海岸林再生の会」のメンバーに労いの言葉をかける村井知事(左から2番目)、左端は名取市の佐々木市長(当時)



村井知事は佐々木市長(当時)と共に植樹も体験。植樹を担う森林組合の職人は1日に6時間で300本から550本植える聞き「神業だなあ」と感心していました



オイスカ名取事務所 統括 佐々木廣一

## 「自分の技術を活かして復興に役立ちたい」

オイスカ名取事務所の統括を務める佐々木。2011年3月末に定年退職し、翌年2月、プロジェクトを担う立場に就いた。

プロジェクト全体を統括する立場にあるだけでなく、「名取市海岸林再生の会」の事務局長でもある。さまざまな仕事が複雑に絡み合うプロジェクトの要だ。

(聞き手: オイスカアドバイザー(前日本経済新聞社 論説委員)の小林省太)

### ーオイスカに関わるようになったきっかけは？

「現場で直接造林の指導をできる人がどうしても必要だ、って言われたんです。私は海岸林を担当したこともあったし、自分が身につけた技術を活かして復興にいくらかでも役立ちたいという気持ちも持っていた。頼まれた仕事は私が持っている技術のなかでやれると思いました。ほかにプロジェクトに総合的に関わられるような人はいなかったということもあります」

### ー苗木作りを担ったのは、被災農家を中心とした再生の会のメンバー。震災翌年から、事務所に隣接した畑などでクロマツの苗作りを始めた。苗作りで苦労したことは？

「地元の人には野菜と同じっていう感覚が強いけど、木と草本とは違う面が多い。彼らは野菜には詳しい分、そこを理解してもらうのに時間がかかりました。例えば小さい苗の段階だと木は野菜より弱い。野菜だと消毒剤を少々強くしても薬害は少ないが、木だと薬害がすぐ出てくる。移植するときも根をきちっと広げてやらないと、木が曲がったままになったり成長が止まったりする。野菜にはそういうことはないんです。そういうことを理解してもらって、いい苗木ができるようになった。地元の種苗組合長は最初、『素人がやることじゃねえ』とやってたけど、二年目には『いや、たいしたもんだ』に変わりました。植栽を担当している森林組合の作業員も『この苗木が一番いい』と言っている。彼らはお世辞言う必要もないしね」

### ー苗木で2年育てた苗を海岸に植える事業は一昨年に始まった。植栽に対する考えは？

「私は結果を出すためにここにいる。このプロジェクトはビジネスとしてやっているということです。ビジネスというのは、当然低コストということでもあります。苗木は買えば一本380円だけど、うちのコストは180円くらい。植林だって金に糸目をつけずにやれば1ヘクタール3000万円かかったりする。ここは110万円くらいです。寄附をもとに進めているプロジェクトだという意識ももちろんありますし。海外から視察に来た人にも、低コストできっちり結果を残すことが大事だと説明しています。それは自分が国有林の仕事を担当して心掛けてきたことと同じです」

ー現在までに植林が済んだのは38ヘクタール、19万本。「月面」とも言われる厳しい土壌にもかかわらず枯れないで根づいた苗は98%を超え、苗木作りも順調に進んでいる。結果は見事に残っている、といえるだろう。

「できすぎなくらいです。林野庁のプロや造林をやっている組織も素晴らしいと言ってくれるし。乾燥が続いて限界だと思ったら雨が降ったり、虫害も広がらなかったり。私は『運も実力のうち。ゴルフとおなじだ』ってずいぶん言ってきたけど、確かについていた面はあると思いますね」

「でも、漫然としていてうまくいったわけではないですよ。たとえば、いつ植林を始めるかを決めるため、毎日天気を見ている。松の活動が始まる温度は3度だって言われているから気温や地温をチェックする。雨の降り具合、湿度も大切だし、あとは風、蔵王おろしがいつ止むかも大きい。温度と雨と風ですね。桜の咲く時期も目安になります。大型連休には作業員が自分の田植えで忙しいから休ませなければならぬ。そういうことを総合的に判断して、長期予報も見決めてるんですよ。温暖化の影響だか、毎年少しずつ早くなっていますね」

「技術者っていうのは、現地を見て、判断して、駄目だと思ったらすぐ変えられなくちゃだめです。そういう柔軟性、現実に正直であることが大切です。みんな枯れちゃったら自分たちの理屈は失敗だったんだって思えないとね。育苗でも、とにかく苗木を見ながら消毒や肥料のやり方を考える。南で虫害が出たら、もうすぐこちらにも来るなあと思って対策を立てたりする。そういうことの積み重ねです」



佐々木廣一(ささき・こういち)  
【1950年8月1日生】  
宮城県松島町出身。高校卒業後、1969年(昭和44年)に林野庁に入り、東北各県で国有林の管理・整備などの仕事に携わった。東日本大震災の直後、2011年(平成23年)の3月末に定年退職。現在に至る